09

墨

味わいのある文字を書けるのは、なぜ？

パソコンの普及によって、文字を手書きすること自体が以前に比べ減ってきているなか、日常生活において硯（すずり）で墨をするということも少なくなりましたが、年末年始にかけては、年賀状を書いたり書初めをしたりと、一年のうちでも筆を持つ機会が増える時期ではないでしょうか。

墨の起源は古く、中国の殷（いん）の時代（紀元前 1500 年頃）までさかのぼるとされています。日本には 610 年に高句麗（古代朝鮮の一国）の曇徴（どんちょう）という僧によって正式に製墨法が伝えられたと、『日本書紀』に記録されています。実際にはそれよりも前から、日本でも墨がつくられていたのではないかと言われています。奈良時代には、仏教が発展し写経が盛んになったことなどから、奈良をはじめ各地で墨づくりが行われるようになりました。鈴鹿（現在の三重県北部）では、平安時代の初期に、近隣の山で採れた松材を燃やして集めた煤（すす）を原料に墨がつくられるようになったと伝えられています。この「鈴鹿墨」は、その後、江戸時代に紀州藩（現在の和歌山県、三重県などを治めた藩）の保護を受けて大きく発展し、「奈良墨」とともに二大和墨として知られています。

墨は、松や菜種油などを燃やして採取した煤に、水で溶いた膠（にかわ）と香料を混ぜ合わせてつくられます。膠は、牛や鹿などの動物の皮や骨などを抽出して得られる動物性たんぱく質です。膠は腐りやすいため、墨づくりは気温が低く乾燥した冬の時期にだけ行われます。膠には独特の臭いがあるために、これを紛らわせる目的で香料が加えられているのですが、その結果として墨を使う人の気持ちを落ち着かせる効果も生まれます。かつては天然香料の麝香（じゃこう）、龍脳（りゅうのう）などが用いられていましたが、現在では大量生産が可能でより安価であるなどの理由から合成香料も使用されています。

膠は、水を加えて熱すると溶け、冷えると固まるという性質があることから、5000 年以上前から中国やエジプトなどにおいて接着剤として使われてきました。墨に用いられる場合は、粉状の煤を固形にまとめるつなぎとなったり、書いた紙などの表面に煤を定着させたりする働きをします。

また、墨をすったときには、水に溶けない煤を膠が包み込んで水中に均一に分散させることによって、墨液となります。このような、ある物質の微粒子が別の物質の中に分散している状態のことを「コロイド」といい、この言葉はギリシャ語で「膠」を意味する“kólla”に由来しています。コロイドのうち、液体の中に分散し流動性を持っているものを特に「ゾル」といい、墨液のほか、牛乳やマヨネーズもこれにあたります。

製造して間もない墨は、すったときに膠の粘りがより強く出ます。時間が経つにつれて膠の成分が分解されていって、すったときに書き味の滑らかな墨液となります。また、筆が通ったところは煤が多く含まれているために濃く、そのまわりのにじみの部分は薄くというように、古い墨ならではの味わいのある線や字が書けるようになるのです。　**（平成 22 年 12 月）**

協力：鈴鹿製墨協同組合